

# 英語名詞句の意味を決定する要因

—統語構造・意味タイプ・ディスコースの観点から—

佐々木 一 隆

## はじめに

一般に言語について総合的な研究を行うには構造と機能の両面を考慮に入れることが重要である。本論文では、こうした方針に沿って、英語名詞句の意味が具体的にどのような要因によって決定されるかについて考察する。

英語において名詞句の意味を決定するには様々な要因を考える必要がある。第一に、名詞句のもっている文字通りの意味を決めるためには、統語構造に従って主要部の名詞を中心にして補部や修飾語句や指定辞などの意味を合成しなければならない。換言すれば、名詞句の内部構造に照らして、合成性の原理に基づいて名詞句の意味を部分から全体へと計算していく必要がある。第二に、英語の名詞句全体がもつ意味タイプをそれぞれの分布において特定することである。この点については、佐々木 (2009: 37) が述べているように、英語の名詞句には、個体から事態まで多様な意味タイプが見られる (Pustejovsky 1995: 141-182, Dixon 2005, Keizer 2007)。特にコメントや事態を表す名詞句が発達していることが英語では特徴的である。このような特性がなぜ生じたかについて答えることは有意義である。また、文的名詞句と通常節ではどのような違いが存在するかを探る価値もある。関連する拙論として佐々木 (1991, 2002, 2008) が挙げられる。第三に、こうした名詞句全体の意味を決定することと一部重なるか密接に結びつくことだが、ディスコースがもたらす意味、あるいはディスコース・文脈・場面などから推論された結果生じる意味というものがある。

本稿では、以下の4つの節を立てて名詞句の意味を決定する要因について論じる。第I節では、名詞句内部において統語構造に従って文字通りの意味がどのように合成されるかについて論じる。第II節では、名詞句全体がどのような意味タイ

プをもち、動詞との間でどのような意味役割を担い、互いに類似している派生名詞化形と節がどのような点で意味が異なるかについて取り上げる。第III節では、ディスコースがもたらす意味、あるいはディスコース等から推論された結果生じる意味について考察する。最後に第IV節では、第I節から第III節までに取り上げた3つの観点に照らして実際のデータを見る。データは話しことばを含んだアメリカの現代小説と、英語と「アングロ」文化の関係を論じた学術書から引用する。

## I. 統語構造の観点

一般に英語の名詞句は主要部の名詞を中心にその前後に様々な要素を伴って構成され、名詞句そのものが表す文字通りの意味は、主要部名詞とその前後の要素を統語的に足し合わせることで決まってくる。

Quirk *et al.* (1985: 1238) の術語を用いれば、例えば (1) の文における角括弧で囲まれた主語の名詞句では、斜体の *girl* が主要部 (HEAD) であり、その前に決定詞類 (DETERMINATIVE) としての *the* と前位修飾 (PREMODIFICATION) の働きをする *tall* が現れ、その後には後位修飾 (POSTMODIFICATION) の働きをする *standing in the corner* が生じている。

(1) [*The tall girl standing in the corner*] is my sister.

当該名詞句が内面的にもっている意味は、主要部の *girl* とその前後に現れている修飾語句 (*tall* と *standing in the corner*) および句の先頭にある決定詞 *the* のそれぞれの意味を統語構造に即して合計することにより決定されるということである。

また、Quirk *et al.* (1985: 1238) によれば、文の場合と同様に名詞句も際限なく複雑になることができる。例えば (2) の文において斜体で示した主語名詞句は、主要部名詞 *girl* のあとにいくつもの

後位修飾表現が重なって生じており、このように複雑な名詞句の場合でも統語構造に即した意味の合成により、名詞句そのものの意味が決定される。(2) *The tall girl standing in the corner who became angry because you knocked over her glass after you waved to her when you entered* is Mary Smith.

なお、名詞句の内部構造については生成文法理論における X-bar 理論に基づく分析に代表される多くの研究があるが、本論文では最適な統語理論がどれであるかの検討は別の機会に譲ることとし、名詞句そのものが有する文字通りの意味が、しかるべき統語構造に基づいて決定されるという点を確認するに留めることにする。

## II. 意味タイプの観点

第 I 節では、英語の名詞句の意味が文内の統語的位置にかかわらず、その内部構造（すなわち内的な統語構造）から出てくる意味について触れたので、この第 II 節では、同一文内にある他の要素とのかかわりの中で決まってくる英語名詞句の意味について考察する。

こうした考察を行うには少なくとも 3 つの観点到に留意が必要であると思われる。

第一は、動詞や前置詞との関係において名詞句がもつ主題役 ( $\theta$ -role) のことである。

### (3) *Mary put the flowerpot on the desk.*

この文において *put* という動詞が用いられていることから、*Mary* は動作主を、*the flowerpot* は主題を、*the desk* は着点をそれぞれ表している。

第二は、英語の名詞句全体がもつ意味タイプをそれぞれの分布において特定することが必要である。この点については、佐々木 (2009: 35-36) が指摘しているように、英語の名詞句には個体、事態、コメントなどの多様な意味タイプが見られる。以下の (4) に示した引用文中にある下線部 (A) ~ (E) は説明の関係で筆者が施したものである。

(4) *When in the Course of human events it becomes necessary for <sup>(A)</sup>one people to dissolve <sup>(B)</sup>the political bands which have connected them with another and to assume among the powers of the earth, the separate and equal station to which the Laws of Nature and of Nature's God entitle them, <sup>(C)</sup>a decent respect to the opinions of mankind requires that they should declare*

*the causes which impel them to the separation.*

The United States Declaration of Independence is perhaps <sup>(D)</sup>the best-known passage of English prose expressing an abstract political idea. Its subject matter, <sup>(E)</sup>a challenge to power, has long been a part of the human condition. But challenges to power had hitherto been contests of sheer brawn, and here the challenge was being justified from first principles worked out by Enlightenment philosophers. Indeed, what was being articulated was not only the rationale for the challenge, but the rationale for the rationale. (Pinker 2007: 235)

すなわち、下線部 (A) 「一つの民族」、(B) 「その民族と別の民族をつなぐ政治的絆」、(D) 「抽象的な考えを表した最も有名な英語散文の一節」はそれぞれ個体を、(C) 「人間の意見への適切な敬意」は事態を、(E) 「それは権力への挑戦だが」はコメントを表しており、(A) ~ (E) の名詞句はおのおの統語的分布に応じた意味タイプを示していることが分かる。

特にコメントや事態を表す名詞句が発達していることが英語では特徴的である。このような特性がなぜ生じたかについて答えることは有意義である。また、Pustejovsky (1995: 141-182) が取り上げているが、事態などを表す文的名詞句と通常の節ではどのような違いが存在するかを探る価値もある。本稿では、こうした問題への具体的提案までには至らないが、重要な課題として確認しておく。なお、関連する拙論として佐々木 (1991, 2002, 2008) が挙げられる。

## III. ディスコースの観点

この第 III 節では、前節で取り上げた名詞句全体の意味を決定することと一部重なるか密接に結びつくことになるが、ディスコースがもたらす意味、あるいはディスコース・文脈・場面などから推論された結果生じる意味について考察する。

このディスコースから出てくる名詞句全体の意味に関連して、佐々木 (2007: 86) では、前後に文脈が与えられたディスコースの中で、派生名詞が実際にどのように使用されているかについて考察している。具体的には、*education* と *procedures and hospitalizations* の 2 つを取り上げ、概略以下のように論じている。

(5) 派生名詞 education について

以下の文章に示した下線部の派生名詞 education は、直前の語である Such と結びついて名詞句を構成し、この名詞句が全体として照応形となって、先行文の内容（「高等レベルの教養教育と教員養成は一般に総合大学や単科大学で行われる」）と照応関係を構成していると考えられる。

Higher general education and training generally takes place in a university and/or college. Such education is based on theoretical expertise. Higher general education might be contrasted with higher vocational education, which concentrates on both practice and theory. (Higher Education, *Wikipedia*, May 27, 2007, p. 2)

この場合の Such education は全体で照応形を構成している。その理由は、education が動詞由来の派生名詞であり、文や節の内容を表す性質を持つため、Such と融合して前文の内容を受ける文照応となっているからである。

(6) 派生名詞 procedures and hospitalizations について

以下の文章に出てくる下線部の派生名詞 procedures and hospitalizations も、先行する All および指示詞 these とともに名詞句を構成し、この名詞句全体が照応形になっている。ただし、この先行詞は、education の場合とは異なり、特定の一文には局所化できない。

… When she sat on his hospital bed and wept in his arms it was for many reasons, not least for his having left her when she was thirteen. She'd come to the shore to assist him and all his cool-headed and sensible daughter could do was relieve the difficulties that resulted from the divorce and confess to the undying fantasy of a parental reconciliation that she had spent more than half of her life hoping for. "But there's no remarking reality," he said softly, rubbing her back and stroking her hair and rocking her gently in his arms. "Just take it as it comes. Hold your ground and take it as it comes. There's no other way."

That was the truth and the best he could do—and exactly what he'd told her many years earlier when he

held her in his arms in the taxi coming home from the emergency room while she shook with sobs because of the inexplicable turn of events.

All these procedures and hospitalizations had made him a decidedly lonelier, less confident man than he'd been during the first year of retirement.... (*Everyman*, pp. 78-79.)

すなわち、All these procedures and hospitalizations の先行詞は、直前の2つのパラグラフを少なくとも含む、先行する文章であると考えられる。これはこの派生名詞が複数形であることから分かる。このように、照応形 All these procedures and hospitalizations は、先行詞と「文章」照応の関係にあると言える。

なお、(5) の Such education と (6) の All these procedures and hospitalizations はともにそれぞれの文における主語の名詞句であり、ディスコースの観点から見ると先行文脈の内容を受ける「主題」の役割を果たし、後続する「題述」(is based on theoretical expertise と had made him a decidedly lonelier, less confident man than he'd been during the first year of retirement) へと導いている点に注意されたい。

さて、ディスコースや文脈、場面などから出てくる名詞句全体にかかわる意味についてもう一点だけ述べることにする。

Pustejovsky (1995) では、語彙意味論の立場に立って、全く新しいコンテキストにおいて語が使用される際に新たな意味を創造して語の多義性を生じさせたり、名詞表現が多様な意味を呈したりするというに着目し、意味の合成性 (semantic compositionality) とは何かについて新たな定義を試みている。こうした認識のもと、Pustejovsky (1995) はクオリア構造という仕組みを仮定して、そのクオリア構造において語彙項目がどのように意味情報を記号化するかという問題を扱っている。具体的に Pustejovsky (1995: 88) では、(7)a-c の下線部で示した動詞 enjoy が目的語名詞句の内容に呼応して「省略」されている行為を ( ) 内に示したようにそれぞれ「補う」ことに関わっていることを指摘している。

(7) a. Mary enjoyed the movie last night. (watching)

b. John quite enjoys his morning coffee. (drinking)

c. Bill enjoyed Steven King's last book. (reading)

Pustejovsky (1995: 88) ではまた、(8)の下線部で示した動詞 *prefer* が、目的語名詞句 *cookbooks* および前置詞 *to* の目的語名詞句 *textbooks* に隠れている行為 *selling* を「補う」ことに関わっていると述べている。

(8) Book sellers usually prefer cookbooks to textbooks around Christmas. (selling)

なお、(8)の場合、こうした「補い」には主語の *Book sellers* も関わっており、隠れている行為は *reading* ではなく *selling* であることが決まると同書では説明しており、興味深い。

#### IV. データ

この節ではこれまで述べてきた3つの観点、すなわち統語構造、意味タイプ、ディスコースの観点を総合して、筆者が新たに収集したデータを用いて、名詞句の意味解釈の例をいくつか示しながら、その決定要因について確認する。

データは話しことばを含んだアメリカの現代小説 (Christopher Moor's *Practical Demonkeeping*) および英語と「アングロ」文化の関係を論じた学術書 (Anna Wierzbicka's *English: Meaning and Culture*) の一節から引用した。日常の話しことばを含む散文体と学術的な筆致による書きことばという互いに異なるデータを見ることにより、文体のバランスを確保している。なお、以下の引用に出てくる下線部は、説明のために筆者が施したものである。

##### 1. 現代アメリカ小説の一節から

###### 1 THE BREEZE (*Practical Demonkeeping*, pp. 3-4)

次の引用文はビリー・ワトソンがブリーズを自分の車に乗せて運転している場面である。

The Breeze blew into San Junipero in <sup>(A)</sup>the shotgun seat of Billy Winston's Pinto wagon. <sup>(B)</sup>The Pinto lurched dangerously from <sup>(C)</sup>shoulder to centerline, <sup>(D)</sup>the result of Billy trying to roll a joint one-handed while balancing a Coors tallboy and bopping to the Bob Marley song that crackled through the stereo.

“We be jammin' now, mon!” Billy said, toasting The Breeze with a slosh of the Coors.

The Breeze shook his head balefully. “Keep the can down, watch the road, let me roll the doobie,” he said.

“Sorry, Breeze,” Billy said. “I'm just stoked that we're on the road.”

<sup>(E)</sup>Billy's admiration for The Breeze was boundless. The Breeze was truly cool, a party renaissance man. He spent his days at the beach and his nights in a cloud of sinsemilla. The Breeze could smoke all night, polish off a bottle of tequila, maintain well enough to drive the forty miles back to Pine Cove without arousing the suspicion of a single cop, and be on the beach by nine the next morning acting as if the term hangover were too abstract to be considered. On Billy Watson's private list of personal heroes The Breeze ranked second only to David Bowie.

以下にある (A) ~ (E) は、引用文中の下線部 (A) ~ (E) で示された名詞句の統語構造に基づき、意味タイプとディスコースの情報も反映した意味解釈を表したものである。また、それぞれの意味解釈に至った要因についての説明も加えてある。

(A) 「ビリー・ワトソンのピントワゴン車の助手席」：この名詞句は個体で場所を表す。shotgun seat が助手席という意味になるのは、もとは用心棒として銃を持って馱馬車の御者の横に座ったというアメリカ文化が反映しているものと考えられる。

(B) 「そのピントワゴン車」：この名詞句は個体で移動するものとしての主題を表す。先行文の内容をふまえ、Pinto という語で代わりに表現しているため、メトニミーの一種であると見なされる。

(C) 「路肩」：この名詞句は個体で起点を表している。The Pinto lurched dangerously from shoulder to centerline という車での移動について語っている節の中で shoulder が使われているため、文字通りの意味から拡張して「路肩」の意味が出てきたと見なすことができる。

(D) 「それは、ビリーがクアーズ [米国のビール] の缶のバランスをとり、ステレオから流れるボブ・マレーの歌に合わせて踊りながら、マリファナタバコを片手で巻こうとした結果である」：この名詞句は先行する主節を受けて、コメントを与えており、主節の事態に対する理由づけを行っている。

(E) 「ビリーがブリーズのことを賞賛しているこ

と」: この名詞句は事態を表しているが、なぜ賞賛しているかについては後続する文章で説明している。

**17 BILLY** (*Practical Demonkeeping*, pp. 118-119)

次の引用文はビリー・ワトソンが夜間にモーターのフロントで会計の仕事をしている場面である。

Billy Winston was on <sup>(F)</sup>the final stretch of the nightly audit at the Rooms-R-Us Motel. <sup>(G)</sup>His fingers danced across the calculator like a spastic Fred Astaire. The sooner he finished, the sooner he could log onto the computer and become Roxanne. Only thirty-seven of the motel's one hundred rooms were rented tonight, so he was going to finish early. He couldn't wait. He needed <sup>(H)</sup>Roxanne's ego boost after being ditched by The Breeze the night before.

He hit the total button with a flourish, as if he had just played the final note of a piano concerto, then wrote the figure into the ledger and slammed the book. Billy was alone in the motel. The only sound was the hum of the fluorescent lights. From the windows by his desk he had a 180-degree view of the highway and the parking lot, but there was nothing to see. At that time of night a car or two passed every half hour or so. Just as well. He didn't like <sup>(I)</sup>distractions while he was being while he was being Roxanne.

Billy pushed a stool up to the front counter behind the computer. He typed in his access code and logged on.

WITKSAS: HOW'S <sup>(J)</sup>YOUR DOG, SWEETIE?  
SEND: PNCVCAL

The Rooms-R-Us Motel chain maintained a computer network for making reservations at their motels all over the world. From any location a desk clerk could contact any of the two hundred motels in the chain by simply entering a seven-letter code. Billy had just sent a message to the night auditor in Wichita, Kansas. He started at the green phosphorescent screen, waiting for an answer.

PNCVCAL: ROXANNE! MY DOG IS LONELY.  
HELP ME, BABY. WITKSAS

Wichita was on line. Bill pounced up a reply.

WITKSAS: MAYBE HE NEEDS A LITTLE DISCIPLINE. I COULD SMOTHER HIM IF YOU WANT. SEND: PNCVCAL

There was a pause while Billy waited.

PNCVCAL: YOU WANT TO HOLD <sup>(K)</sup>HIS POOR FUZZY FACE BETWEEN YOUR MELONS UNTIL HE BEGS? IS THAT IT? WITKSAS

Billy thought for a moment. This was why they loved him. He couldn't just throw them an answer they could get from any sleazebeast. Roxanne was a goddess.

WITKSAS: YES. AND BEAT HIM SOFTLY ON THE EARS. BAD DOG. BAD DOG. SEND: PNCVCAL

Again Billy waited for the response. A message appeared on the screen.

WHERE ARE YOU DARLING? I MISS YOU. TULSOKL

It was his lover from Tulsa. Roxanne could handle two or three at once, but she wasn't in the mood for it right now. She was feeling a little crampy. Billy adjusted his crotch, his panties were riding up a bit. He typed two messages.

以下にある (F) ~ (K) は、引用文中の下線部 (F) ~ (K) で示された名詞句の統語構造に基づき、意味タイプとディスコースの情報も反映した意味解釈を表したものである。また、それぞれの意味解釈に至った要因についての説明も示している。

(F) 「夜間の会計監査の最終段階」: この名詞句は抽象的な時間・局面を表すが、stretch はもともと空間的な広がりの意味する。この文脈において final stretch が競技のゴール前の直線を表すとは考えにくいので、それが契機となりメタファーによって「最終段階」という抽象的な意味が（瞬時的に）派生したと捉えることができる。

(G) 「彼の指」: この名詞句は個体で動作主を表す。10本全部かどうかは不明だが、複数の指を表しており、擬人化されている。

(H) 「昨夜ブリーズにふられたあと Roxanne の自我を高めること」: この名詞句は事態を表し、この小説の先行文脈での出来事をふまえた内容となっている。Roxanne とはビリーのネット上の呼び名で、アメリカ全土にチェーンを展開している

本ホテルの会計担当従業員がネット上でやりとりする際に使っているもので、Roxanne はその中で女王の立場にある。

(I) 「気が散る物音など」：この名詞句は動詞 district から派生した名詞であるが、動作主の意識は薄く感じられ、事態というよりはむしろ（出来事の結果生じた状態としての）個体を表す。

(J) 「お前の犬」：この名詞句は個体である種の主題を表す。具体的に何を指しているかは先行文脈などで判断する必要がある。

(K) 「彼の哀れでほんやりとした顔」：この名詞句も個体を表し、動作の受け手となっている。具体的に何をさしているかはやはり先行文脈などで判断する必要がある。

## 2. 学術書の一節から

**Chapter 1 English as a Cultural Universe** (*English: Meaning and Culture*, p. 1)

### 1.1. English—the Most Widely Used Language in the World

次の引用文は世界で最も広範に使われている言語である英語とその文化について論じた学術書の第1章の冒頭部分である。

Few would now disagree with <sup>(L)</sup>the view expressed in Quirk et al.'s (1985, 2) *Comprehensive Grammar of the English Language* that “English is the world’s most important language.” It is certainly the world’s most used language. As David Crystal noted more than a decade ago in his *Encyclopedic Dictionary of Language and Languages* (1992, 121), it is spoken “by a large and ever-increasing number of people—800,000,000 by a conservative estimate, 1,500,000,000 by a liberal estimate.... It has official status in over 60 countries. <sup>(M)</sup>Estimates also suggest that at least 150 million people use English fluently as a foreign language, and three or four times this number with some degree of competence.... English is also the language of international air traffic control, and the chief language of world publishing, science and technology.” Crystal’s more recent estimates are even higher (Crystal 2001, 2003a, 2003b). In the words of the Indian American linguist Braj Kachru (1997, 69), “the hunger for learning the language—with whatever

degree of competence—is simply insatiable.”

Given <sup>(N)</sup>the rapidly expanding role of English in the contemporary world, it is hardly surprising that numerous books concerned with different aspects of English, both scholarly and pedagogical, are published every year. And yet there is one striking gap in this literature: although many books have been and are being published that link the Japanese language with Japanese culture or Chinese language with Chinese culture, hardly any recent books explore the links between the English language and Anglo culture.

There are, no doubt, many reasons for <sup>(O)</sup>this weakness within the huge literature dealing with English. I believe one of them is that in recent times considerable opposition has developed in the English-speaking world to the notion of “culture,” that is, “culture in the singular, “ an opposition linked with fears of ‘essentialism’ and ‘stereotyping’.

以下にある (L) ~ (O) は、引用文中の下線部 (L) ~ (O) で示された名詞句の統語構造に基づき、意味タイプとディスコースの情報も反映した意味解釈を表したものである。また、それぞれの意味解釈に至った要因についての説明も示している。

(L) 「Quirk ほかの *Comprehensive Grammar of the English Language* の中で表明されている「英語は最も重要な言語である」という見解」：この名詞句は抽象的であるが個体を表し、賛成しないかどうかの対象となっている。

(M) 「様々な推定」：この名詞句は動詞 estimate から派生した名詞であるが、動作主の意識は薄く、事態というよりはむしろ（出来事の結果生じた状態としての）個体を表す。複数形となっていることはその証左である。

(N) 「現代世界において英語の役割が急速に広がっていること」：この名詞句は事態を表し、先行段落を受けてこの文における主題となっている。統語上の主要部は名詞の role であるが、意味解釈上は修飾部の rapidly expanding になっている点が興味深い。

(O) 「こうした英語を扱った膨大な文献の中には英語とアングロ文化の関係を探った本が最近ほとんどないこと」：この名詞句は事態を表す。直前の段落を受けて weakness という名詞を用いて事

態を表しており、説明されるべき理由の対象となっている。

### おわりに

本論文では、言語における構造と機能を総合的に捉えるという立場から、英語名詞句の意味が具体的にどのような要因によって決定されるかを考察してきた。具体的には、4つの節を立てて名詞句の意味を決定する3つの主要因を記述し、具体的なデータを用いて各要因について確認した。

第I節では、名詞句内部において統語構造に従って文字通りの意味がどのように合成されるかについて論じた。第II節では、名詞句全体がどのような意味タイプをもち、動詞との間でどのような意味役割を担うかなどについて取り上げた。第III節では、ディスコースがもたらす意味、あるいはディスコース・文脈・場面などから推論された結果生じる意味について考察した。最後に第IV節では、第I節から第III節までに取り上げた3つの観点に照らして実際のデータを見た。

以上のような議論を通して、英語名詞句の総合的研究に向けて、当該名詞句がもつ多様で多層な意味の実像を示した。

### 参考文献

- 佐々木一隆 (1991) 「先行文と同格名詞句の意味関係について」『現代英語学の諸相』(宇賀治正朋博士還暦記念論文集)、開拓社、416-424頁。
- 佐々木一隆 (2002) 「英語の名詞修飾表現の多様性」大塚英語教育研究会『大塚フォーラム』No. 20、リーベル出版、51-56頁。
- 佐々木一隆 (2004) 「英語の文的名詞句を日本語に翻訳する：文法の視点から」宇都宮大学国際学部編『移動・都市・翻訳』。
- 佐々木一隆 (2007) 「英語の統語論と形態論の平行性：ディスコースにおける照応と削除」『宇都宮大学国際学部研究論集』第24号、83-91頁。
- 佐々木一隆 (2008) 「英文法への意味論的アプローチ：Dixon (2005) の評価について」宇都宮大学外国文学研究会『外国文学』第57号、61-75頁。

佐々木一隆 (2009) 「英語転移修飾表現の動的分析に向けて」宇都宮大学外国文学研究会『外国文学』第58号、31-33頁。

- Dixon, R. M. W. (2005) *A Semantic Approach to English Grammar*, Second Edition, Oxford University Press.
- Keizer, Evelien (2007) *The English Noun Phrase: The Nature of Linguistic Categorization*, Cambridge University Press.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, Volume 2 Descriptive Application, Stanford University Press.
- Leech, Geoffrey, and Jan Svartvik (2002) *A Communicative Grammar of English*, Third Edition, Pearson Education Limited.
- Moore, Chritopher (1992) *Practical Demonkeeping*. HarperCollins Publishers Inc.
- Pinker, Steven (2007) *The Stuff of Thought*, Penguin Books.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*, The MIT Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman Group Limited.
- Sasaki, Kazutaka (2003) “Discourse and Premodification”, 『宇都宮大学国際学部研究論集』第15号, pp. 113-116.
- Sasaki, Kazutaka (2005) “A Communicative Approach to the ‘S, NP’ Construction in English”, 『宇都宮大学国際学部研究論集』第20号, pp. 37-42.
- Wierzbicka, Anna (2006) *English: Meaning and Culture*. Oxford University Press.

# **The Semantics and Pragmatics of the English Noun Phrase: In Terms of Syntactic Structures, Semantic Types, and Discourse Structures as Meaning-Determining Factors**

SASAKI Kazutaka

## **Abstract**

This article aims to discuss the semantics and pragmatics of the English noun phrase in terms of syntactic structures, semantic types, and discourse structures as meaning-determining factors, more broadly in terms of language structure and language function. It consists of Introduction, four Sections, and Concluding Remarks, shown below. In particular, the four sections are composed of three types of the semantic-pragmatic discussion plus related data from two kinds of publications.

Introduction

Section I Syntactic Structures as Meaning-Determining Factors

Section II Semantic Types as Meaning-Determining Factors

Section III Discourse Structures as Meaning-Determining Factors

Section IV Data from a Novel and an Academic Book

Concluding Remarks

This article focuses on the semantic-pragmatic aspect of the English noun phrase by taking a seemingly theory-oriented but data-centered approach, and it ensures that the consideration of syntactic structures, semantic types, and discourse structures is required for the description and hopefully explanation of the overall nature of the noun phrase in English.

(2010年6月1日受理)